

令和5年度第2回いなべ市グリーンインフラ推進協議会 会議録

|          |  |
|----------|--|
| 会議名      | 令和5年度第2回いなべ市グリーンインフラ推進協議会  |
| 開催日時     | 令和6年3月8日(金)11:00~12:00   |
| 開催場所     | いなべ市役所庁議室  |
| 出席者      | <p><b>【委員長】</b>1名<br/>西田貴明</p> <p><b>【委員】</b>14名<br/>別所則幸(代理出席)、栗井晴香、辻清成、椎原未来、小林久里子、里中知之、三輪健太(代理出席)、中谷正也、大月浩靖、栗嶋幹人、水谷智仁、橋元直也、二宮正代、矢崎充彦</p> <p><b>【事務局】</b>4名<br/>都市整備部長、都市整備課職員2名、百五総合研究所2名</p> <p><b>【オブザーバー】</b>3者<br/>京都産業大学、バイオーム、東邦レオ</p> |
| 会議次第     | <p>1 開会</p> <p>2 委員長挨拶</p> <p>3 議事</p> <p>4 その他</p>  |
| 配布資料     | <p>事項書</p> <p>資料1_出席者一覧</p> <p>資料2_令和5年度事業経過報告</p> <p>資料3_グリーンインフラに係る山辺交流拠点施設 (yamabe_hiro-Ba) 整備・運営基本計画 (素案)</p> <p>資料4_令和6年度事業計画</p> <p>参考資料1_inabe Green Lab.実施報告</p> <p>参考資料2_外部機関との連携、広報等について</p> <p>参考資料3_SIP 概要 (内閣府資料)</p>             |
| 公開、非公開の別 | 公開   |
| 非公開の理由   | —  |
| 傍聴人の数    | 0人   |

## 議事概要

### 1 開会

#### (事務局:いなべ市挨拶) 資料1

年度途中ではあるが、人事異動等のため3名の委員が入れ替わっている。代理出席やオブザーバーを含め、資料1でご確認いただきたい。

第1回の推進協議会でご協議いただきましたご意見等を踏まえて、旧大安中央児童センター周辺地の活用調査の他、年間のグリーンインフラ事業のご報告と、来年度の事業予定等を共有する。ご意見、ご質問等を遠慮なくお聞かせいただきたい。

### 2 委員長挨拶

#### (西田委員長挨拶)

年々「グリーンインフラ」という言葉が世の中全体に広がっている。国土交通省でもグリーンインフラ推進戦略2023を策定した。より国全体としてグリーンインフラを推進していこうという機運に変わってきている。

先日東京でグリーンインフラ産業展が開催された。いなべ市もグリーンインフラ大賞の優秀賞を受賞した。世の中全体で機運が高まっているなか、先進的に、3年以上も前からすすめた取り組みが非常に注目を集めている。

私も学生と一緒に、一昨年以降、自然や関連施設をまわり非常に勉強になった。世の中全体に広がってきてる中で、ますますここでの取り組みが注目されている。地域の方、市民に役に立つ機会やタイミングが出てくると思う。今日の議論も含めてご支援いただきたい。

### 3 議事

#### (1) 令和5年度の事業報告(資料2、参考資料1～3)

##### (事務局:いなべ市から説明)

<資料2\_令和5年度事業経過報告>により説明

民間資金を活用事業調査についてはこの後詳細を別途説明するが、本協議会において第1回に続き第2回でも合計2回の協議を行い、3回目の協議についてはパブリックコメントという形に変えさせていただきたい。

8月、9月、11月に実施した啓発イベント「inabe Green Lab.2023」は、詳細を参考資料1に記載してある。地域の自然を活かし、人材育成も兼ねたイベントを実施し、親子を中心に年間で800人弱の参加者があった。

「暮らしと自然がつながるラボ」の意見交換で機運を高め、「川であそび、森であるく日」、「森のとびら in 三重」、「扉をノックする日」では市民と連携しながら川や地域林を活用したイベントやワークショップを行った。イベントの内容により、滞在時間や満足度に差があった。アンケート結果を活かし、令和6年度の事業を計画する。

イベント時のアンケート結果は、このあと説明する民間資金等活用事業調査案にも反映している。

参考資料2は広報や外部機関との連携などについてまとめている。

(1) グリーンインフラ官民連携プラットフォーム、ケーススタディーとして技術部会や、金融部会から、いなべ市の事業について意見交換を行った。

(2) 日本生態学科、生態系管理専門委員会の事例紹介で、当該委員会のシンポジウムでにぎわいの森や inabe Green Lab. の事例について紹介をした。

(3) JEAS NEWS 事例紹介として、日本環境アセスメント協会が発行する冊子で、いなべ市におけるグリーンインフラの取り組みを掲載をしていただいた。

(4) 第4回グリーンインフラ大賞については、先ほど西田先生からもご紹介いただいたとおり、にぎわいの森、放棄林を活用した観光拠点としての活動というものが評価され、優秀賞を受賞をした。

引き続き全国の自治体、事業者、大学等とも連携、情報共有しながら事業を進めていきたい。

参考資料3のとおり、大学との連携については、内閣府の「戦略的イノベーション創造プログラム」(略称 SIP) で「スマートインフラマネジメントシステムの構築」の課題としてグリーンインフラに関する5か年の研究が採択され、京都産業大学様の研究プログラムでいなべ市が協力している。

現在は、都市整備課、自然学習室で情報提供などを行いながら、グリーンインフラの手法の地域への実装を目指している。

#### (西田委員長から SIP について補足説明)

グリーンインフラの実装が進む中、グリーンインフラに関する研究で培った様々な技術や手法を地域で使ってもらいながら、どのようにグリーンインフラを推進するか考える研究となっている。

SIP はさまざまな国家プロジェクトの中でも非常に大きな研究プロジェクト。SIP のなかに多くのテーマがある。テーマの1つが「スマートインフラマネジメントシステムの構築」で、インフラ分野を次世代に持っていこうという大単位のプロジェクト。東北大学の久田氏がリーダーで取りまとめている。

次世代のインフラシステムをつくる際、交通システムで「道路の作り方も大事」などいろいろなパーツがある。その一番上で、「スマートインフラによる魅力的な国土、地域都市づくり」が考えられている。

つまり、効率的な道路を作るだけでなく、「緑地をインフラとして活用する」というような役割をもっと高めていく必要があるといったテーマが、サブ課題「e-2」として挙がっている。日本中で100人以上の研究者チームが、このサブ課題に取り組んでいて、参考資料3に示してある。

国全体で行うということで採択され、グリーンインフラという言葉が、インフラの大きな研究プロジェクトの中にもしっかり位置付けられ、我々の分野として大変ありがたい。

本プロジェクトでは社会実装が期待されている。資料では5つ挙げている。「グリーンインフラの機能の評価」、「省庁の連携基盤」、「計画の作り方」、「認証制度」、「実践」。それぞれのチームで分かれながら、これらの研究をしている。

グリーンインフラに関するデータがなかなかないため、それをしっかり作るチームもある。グリーンインフラはどう行えば「良かった」とされるのか、もうちょっと改善したらいいのわからないので、評価方法を考えると、それを進めるような計画や認証制度を国の政策の中でどう作るかも、地域の現状を考えながら取り組んでみたい。

机上の空論では意味がなく、実践が重視される。現場で具体的に意見をもらいながら、今開発しているグリーンインフラの技術が本当に使えるのか、使えるんだったらどういうことを仕組みや計画として考えてくかが趣旨。

私のチームは、筑波大学、東京大学初め全国6大学で共同している。1つは京都産業大学が、拠点として活動していく。関西では、認証制度と、グリーン実装をデジタル活用し考えるのが担当となっている。

実際事業をしているバイオームと東邦レオとも連携しながら、京都産業大学の中でチームをつくった。関西チームだけで20名以上、皆で考えながらやっていきたい。

関西チームは一番実装が進んでいるいなべ市中心のプロジェクトであると、申請段階から内閣府、国土交通省にも相談し、いなべ市と連携していくということで採択された。

私どもは大学が京都府や滋賀県にあるので、これまでこの地域で行ったことを、この地域とも連携しながらいなべ市で行うような取り組みを考えている。

まだチームに了承をいただいている段階ではないが、今後のイメージは次のとおりである。グリーンインフラは、雨庭や大都市の子育てなど非常に多くの取り組みが多岐にわたっている。せっかくいなべ市で行うなら、自然資源を活用した施設「グリーンインフラ拠点」が大変充実しているので、インフラとして価値をより引き出ししていくことが大事である。

ここ数年で市内のいろいろな場所を訪問したが、地域内外から、多くの人が集まる場所があり、かつ非常に価値の高い自然環境が既に存在してる。こういった交流や集客の拠点と価値を結びつけていくことは大事である。

我々はまず、いろんなグリーンインフラがある中で、いなべ市ではにぎわい森に代表されるような拠点を中心にしながらか考えたい。先導的グリーンインフラモデル形成事業でも検討しているが、にぎわいの森は市外からの集客や環境上の価値が非常に高く、回遊効果としても大事な役割がある。

しかし、この非常に重要な拠点でも、まだ活用の余地がある。にぎわいの森だけ来て帰るのではなく、他の場所も見ていただきたいといったことである。

学生と一緒にいった調査結果で、訪問時間が短いとあまり体感してもらえない。より多くの人より長く楽しんでもらうにはどうしたらいいかも課題であるし、滞在している時間が長いと経済的にも繋がりが深くなる。滞在時間を増やすことが重要。

いなべ市の「いなべにぎわいプラン」にもあるとおり、にぎわいの森でどのような価値が大切か考える際、関係人口や産業の増加が自然環境の保全と繋がっていくことが、大切であることを改めて認識している。

国土交通省が整理したグリーンインフラのあるべき姿を示した「グリーンインフラ実践ガイド」が、考え方の参考になる。

もともとのグリーンインフラで期待しているものは、気候変動対策や、生物多様性保全という面だった。今注目されているのは「居心地ががよく歩きたくなるまちなか」や、地域活性化や観光といった文脈で、グリーンインフラの活用が期待されている。

いなべ市以外に、世田谷区や千葉県、他の地域はそれぞれのグリーンインフラの方向性を考えているが、いなべ市では、にぎわいの形成であったり、社会的、経済的効果を含め、議論が広がるようグリーンインフラの活用を考えていきたい。その方向性で実際行う内容は令和5年11月の採択以後、メンバーでも話し合ってる。

主に3つテーマがあると思う。

1つ目は地域にあるグリーンインフラのポテンシャルは非常に高いが、まだ見えてない部分もあるためしっかり整理していくこと。その中で、市民や関係者の方にもっと参加いただき、もっと知っていただきたく機会を増やすツールだったり、普及啓発イベントをデジタル活用してやっていくことが可能と考える。

2つ目は既にあるものも含めさまざまなデジタル技術、共有するツールを活用すること。スマートフォンのアプリケーションや、ドローン撮影による3Dデータの作成、メタバースなどが社会的に可能性があり、調整していきたい。

例えば、にぎわいと自然の関わりを深めるため、スマートフォン活用した市民調査、バイオームなどをもう少しうまく活用したい。バイオームは生き物の写真を撮ると、その種類がわかり、みんなで共有できるというアプリ。こどもたち中心に非常に人気で、何十万ダウンロードがされ、いなべ市でもユーザーは増えている。ユーザーを増やし自然と繋がる機会を作っていく。こういうツールを用いて、いなべの自然をアプリケーションの中でもアピールする検討を始めており、情報提供をいただいている。

去年、他の地域では、公園などと連携して行っていた。資源として可視化しながら、設定していきたい。

それからいなべ市には、農業水利施設まんぼがある。この地域特有の農業的な遺産であり、生態系が非常に関わる。他の地域にはない特徴的な資産と考えており、自然とどう繋がるか考えたい。

にぎわいの森の3次元データも既に作成した。写真のように見えるがドローンなどで撮影し、立体構造でのデータが作られている。立体で中に入れるようになっており、下から見たり上から見たり、いろんな形で見られる。デジタル化することで、いなべ市の活用を共有できる。

うちの研究室ではAR拡張現実として、スマホで映し出していくこともできるかもしれない。ポケモンGOのように、アプリ内ににぎわいの森が出てくるイメージ。さらメタバースで3次元のデータの中に、Googleかけて入ることも技術的には今後可能になってくるかもしれない。

にぎわいの森はよい場所だが、来ることが大変な人のファーストステップとして、デジタルを使って知ってもらうことができる。

3つ目に自然との関わりを増やすためのいろんなイベントを共有するアプリケーションも、大学の情報系の先生と共に考えている。例えば混雑情報を共有するアプリを作成した。にぎわいの森でも混んでいるところがあるが、混雑を把握、共有しながら、どこ行けば空いているか認識ができるようになる。これをさまざまな環境イベントを組み合わせることで、多くの人が、自然の価値とどこへ行ったら一番楽しめるのかが見えたらいいと考える。想像の範囲だが、地域でのイベントを繋げながら、にぎわいの推進に向けて今検討している技術が活用できるとよい。

このような提案が地域になじみ、活用できるのか、この場以外でもしっかり議論の機会をいただきたい。おそらく実際に考えるには適切な場所や、マイナス面も検討し議論が必要。そういった情報を、当面は整理したい。市の関連部門には、個別にお時間いただいて、ヒアリングを行う予定。

3年間ぐらいはツールを地域で紹介したり、議論の機会をいただき、今の地域活動で盛り上げることに、少しでもお役に立ちたいと考える。せっかく内閣府のプロジェクトのため、ほかにも展開できるよう頑張りたいのでご指導いただきたい。

## (2) 民間資金等活用事業調査(資料3)

### (事務局:百五総合研究所から説明)

<資料3\_グリーンインフラに係る山辺交流拠点施設(yamabe\_hiro-Ba)整備・運営基本計画(素案)>により説明

本年度の第1回協議会では、スケジュールの共有や、先進事例調査結果の報告、サウンディング調査の実施方法について審議をいただき、委員長からは、ハード面に自然を活かした機能を付加するといったグリーンインフラの利点により注目することについて助言をいただいた。

P2 をご参照ください。ここでは、本計画を策定することになった経緯を説明している。イメージ図には、「にぎわいの森」をきっかけにグリーンインフラを通じたまちづくりを開始した後、グリーンインフラの効果検証の実施、ワークショップ開催を経て、旧大安中央児童センターの跡地活用の必要性の検討がなされ、そして、実証実験イベントなどを踏まえて、このたびの計画策定となった流れを示している。また、P4 からの沿革には、本計画に関係する事項などを整理している。

P11 をご参照ください。ここでは、国や市における上位計画や関連計画として、国土交通省が策定した「グリーンインフラ推進戦略」や、市の総合計画などについて、本計画との関係性を記載している。「グリーンインフラ推進戦略」は、令和5年度に改訂されたもので、同戦略には、「グリーンインフラのビルドイン」に係る7つの視点が掲載されているが、本計画は、「連携」「コミュニティ」「資金調達」の視点を重視している。

P18 の第2章をご参照ください。この章では、これまでの効果検証などで把握したまちづくり推進における課題と市民の声などを掲載している。P18～19 に掲載のとおり、「にぎわいの森」を核としたまちづくりの課題については、こども連れで滞在できる空間や、他の施設への回遊性、市民が日常的に利用できる機能の確保を挙げており、P20 以降には、旧大安中央児童センターの代わりとなる施設や、市民等の居場所、自然保育やコミュニティの場が求められている現状を整理している。

P34 の第3章をご参照ください。第1回の協議会でご報告した先進事例の調査結果を掲載している。なお、「神岳テラス」を、追加で調査した。

P40 の第4章をご参照ください。この章では、整備予定地とその周辺の概要を掲載している。その中に、有識者による現地視察及びヒアリング調査の結果も掲載した。P45 をご参照ください。

有識者として、都市計画を専門とする三重大学の近藤准教授と、野外体験活動を専門とするキャンプ inn 海山の森本マネージャーに事業を実施する際における留意点などを聴き取った。

野外体験活動に適したフィールドが既にあり、また、市民等がアクセスしやすい利点があるとの意見のほか、事業を実施する上ではエリアマネジメントの視点が重要であることや、実施するサービスに環境啓発やSDGsの視点を取り入れることについて助言をいただいた。

P47 の第5章をご参照ください。ここでは、本計画の進むべき方向性を整理した。P47 の「1. コンセプト(基本理念)」「2. 基本方針、整備・管理運営に係る方針」については、若干の修正をしたが、

第1回協議会において審議いただいた内容を掲載した。

P49をご参照ください。本計画で期待されるグリーンインフラの効果を、「にぎわいの森」の効果検証結果を参考にして整理した。本計画で整備されるインフラについては「みどりのオープンスペース」「野外体験活動の場所」「みどりと交流・研修施設が一体になった空間」「里山作りの拠点」の4つと整理した上で、それぞれの評価指標を整理した。これらをもとに、定期的に成果を検証しながら、さらなるまちづくりの推進に活用する考え方を示した。

P50の第6章をご参照ください。ここでは、第1回で審議いただいた内容をベースに、配置が可能な建物規模等を検証しながら、また、市民等の意見を反映させながら、必要な面積や機能などを検討している。

P52～54には、整備する上での配慮事項を整理した。グリーンインフラに係る事項について説明する。P52の配置計画においては、各所においてみどりが感じられるように配慮することを整理した上で、バイオフィリックデザインの概念を取り入れた「にぎわいの森」を挿絵として紹介している。また、建物の内外において、様々な過ごし方ができるように配慮することを求めた。

P53をご参照ください。動線計画として、交流が促進される配慮を求めた。プライベートな時間を過ごすことができるとともに、偶発的な交流を促進することを期待するものである。

P54においては、実証実験イベントの成果や、イベント等で得られた市民等の意見をもとに、プログラムに使用できる樹木を選定することや、市民参加型の整備を行うこと考え方を示している。

これらは、グリーンインフラ推進戦略におけるグリーンインフラビルドインの「連携」や「交流」などの考えにマッチするものである。

続いて、P55の第7章をご参照ください。この章は運営に関する計画となる。

目標来場者数に関しては、旧大安中央児童センターの来場者数の実績が年あたり約8千人であることなどを踏まえて、12,000人とした。

具体的なサービス内容としましては、P56に記載のとおり、みどりのオープンスペースの中で市民が快適に過ごせるためのサービスや、自然体験の機会を増やすプログラムの実施を計画した。また、地域連携イベントの実施することや、管理運営にあたっては、市内企業や団体等と協議しながら行う計画とした。

なお、P57には、「評価指標とモニタリングの考え方」を記載した。モニタリングに関しては、先ほどご説明した評価指標を使用したモニタリングにより、継続的に高い成果に結びつくように改善を図るものとした。

また、令和4年度に審議いただいた「グリーンインフラに関するファイナンスモデルの検討」の結果を踏まえ、管理運営を行う団体が、施設外で地域課題の解決に向けた活動を追加で実施する場合には、その成果に応じた補助を実施するなどといった管理運営団体が地域づくりに取り組むためのモチベーション向上策を検討する。

P59以降は、民間資金等活用の調査結果となる。調査対象とした事業方式については、本計画は運営内容が施設を特徴づける観点から、施設整備と管理運営が一体的な事業方式を対象とした。一方で、民間資金等活用事業の代表格であるPFI方式については、事業規模などから考えて財政負担の削減効果が見込みにくいものと考えられ、これらから、DBO方式をベースに調査及び検討を進めた。

具体的な調査方法は、P63からの第9章に記載した。第1回で審議いただいたとおり、民間意向

調査としてアンケートとヒアリングなどを実施したほか、本計画と連携を希望する市内企業・団体等の募集を行った。なお、市内企業等の募集に結果については、P65 に掲載している表のとおり、多くの連携内容のエントリーがあった。

P66 には、アンケート及びヒアリング結果などの概要を掲載しております。ヒアリング先については、本計画に対して関心が高く、また、アンケートにおいて具体的な記載がみられた運営企業5社に対して行った。いずれも、全国において、公園や環境学習施設、少年自然の家などに係る民間資金等活用事業において豊富な実績を有している。

結果の概要を説明する。まず、利用者満足度に関しては、類似事業を培ったノウハウを生かして効率的・効果的なサービスが実施できるとの意見や、民間ならではのサービスが実施できるといった意見が目立った。

グリーンインフラのテーマについても、みどりの中で過ごすことの利点を広める取組や、環境保全に係る啓発につながる取組についても、類似事業においても広く実施されているため、効果的に実施できるとの意見がみられた。

周辺エリアをフィールドとした活動を行うことに関しても、類似事業においても実施されているため、特に抵抗はないといった意見がみられた。

そのほか、本計画の重要テーマである市内企業等との連携に関しては、積極的に連携をしたいとの意見が多くみられた。

これらから、グリーンインフラの推進や交流促進といったテーマにおいて、民間ノウハウの活用による効果的な管理運営が可能とみられる。

収益事業に関しては、立地条件などを考慮して、物販やプログラムなどの事業での収益面の効果は限定的との意見が目立ったが、実施することで利用促進の効果は見込まれるとの意見もあった。

民間事業者の参加に関する意見については、DBO や事業期間、業務内容等について、特に問題視する意見はなかった。

これらのことから、第 10 章の事業手法の選定においては、民間資金等活用事業として「DBO方式」を採用することが有効との結論を示した。

最後に、P75 に、本計画の今後の課題を整理した。民間資金等活用事業を導入するにあたっては、今後、求められる業務水準や、前提となる事業環境に関する情報を整理しておく必要がある。

具体的な整備予定地に関する調査のほか、周辺エリアの利活用に関する事項、ソフト事業における市内企業・団体や市民等の関わり方や、市内企業等との連携体制に関して、今後、整理を進めていく必要がある。

#### **(委員長からコメント)**

前回よりかなり内容が具体化され、分かりやすくなっており、とても良いと思う。

### **(3) 令和6年度の事業計画(資料4)**

#### **(事務局:いなべ市から説明)**

<資料4\_令和6年度事業計画>により説明

大井田地区交流拠点整備は、先ほど説明があった旧大安中央児童センターの活用について、その整備や運営であったりというところ。方向性が概ね確定次第、具体の整備を進めていきたいと考えている。



ただし、国の補助金等も効果的に活用をして事業を進めたいと考えており、記載のスケジュールが、後ろ倒しになる可能性もある。

啓発イベント inabe Green Lab.は、今年度の実施結果を分析した上で、引き続き事業を実施していきたい。これまでの inabe Green Lab.の取り組みにより、運営に携わるスタッフの方々が増えている。スタッフ個々のスキルが上がってきたことも踏まえ、来年度は季節ごとに実施を検討している。

参加者とスタッフが深いコミュニケーションをとりながらこの満足度の高い自然体験を提供していくという計画になっている。

まちづくり会議では、これまでの取り組みで連携した、市内外の個人や団体とともに、市内で自然学習、体験に使えるエリアや題材、手法について調査、情報収集を行う。収集した情報については啓発イベントで活用をしていく他、今後パンフレットの作成や、データベース化を行うなど検討しておりその展開方法もすべて会議の中で検討していきたい。

なお、啓発イベントとまちづくり会議については、みえ森と緑の県民税や岡田文化財団の助成事業を活用する。

SIPも5ヵ年終了時に他の自治体でも横展開ができる事例となるよう、私どもも引き続き積極的に連携協力を行っていきたい。なお、今月18日に当市関係各課へのヒアリングを予定している。

市内企業等との連携については、例えばいなべ市が出資し設立した自然度電力いなべが、事務所への薪ストーブや薪ステーションの設置を検討している。この取り組みについては農業、林業、脱炭素に関わるため、引き続き関係者の皆様にご相談させていただきながらですね進めていきたい。

他の事業についても、実施時に委員の皆様の報告を、ご協力をお願いすることがあるかと思いますが何卒よろしく申し上げます。

## 4 その他

### (事務局:いなべ市から連絡事項)

「グリーンインフラに係る山辺交流拠点施設(yamabe hiro-Ba) (仮称)」整備・運営基本計画(案)のパブリックコメントを4月実施予定。開始したら委員の皆様にもお知らせするので、ご意見を賜りたい。